

初山と浅間塚 健康やかな成長を願って



写真1 浅間台・浅間塚

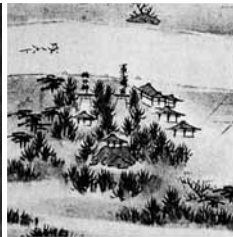


図1 『中山道分間延絵図』に描かれた「上尾・浅間塚」

写真2 昨年の小塚浅間塚の初山行事



富士山への信仰が盛んとなった江戸時代後期には、富士講と呼ばれる富士山参拜のための集団が組織され、富士登山を行った。こうした活動が活発になる中、登山ができない人々のために、富士山を模して土を盛った「富士塚」が、江戸や周辺地域で築造されるようになった。霊峰富士を模して造られたが、頂上に浅間神社が鎮座することから、市内では富士塚ではなく、浅間塚と呼ばれてきた。

市内には消滅したものを含め、江戸時代後期以降、15基の浅間塚が確認されている。文化3(1806)年の『中山道分間延絵図』に描かれている浅間塚(図1)は、確認できる中では最古と考えられ、現在は氷川鍛神社境内に移築されている。

かつては塚があったものの、6基の塚が開発などにより時代とともに姿を消した。その中には整地による造成工事で塚が削られる前に、考古学的な手法で記録された例がある。地名にも関わりがある浅間台・浅間塚である(写真1)。昭和57(1982)年に発掘調査が実施された。

一方、戸崎の浅間塚は、高さ4.8m、直径約25mの円形で、戸崎の開発領主と伝えられる長沢家が所有し、後述するが、この塚で行われる初山行事の祭主として祭事を執り行っている。

また、平方の小塚浅間塚は、「おおつか」とも呼ばれ高さ4.6m、一辺26mの方形の塚で、地域で組織される小塚講によって初山行事が執り行われている。これらの2例は、現存する浅間塚としては市内最大の規模であると同時に、民俗行事を伴うことから、富士浅間信仰を考える上で貴重な民俗文化財として、上尾市指定有形民俗文化財に指定されている。

毎年7月1日、富士山では山開きが行われる。霊山である山への入山を解禁する日を山開きとし、山開きの期間中の無事を祈ってさまざまな行事が行われてきた。

この富士山の山開きに合わせ、埼玉県東部地域などでは、浅間塚で「初山」と呼ばれる行事が行われる。

子どもが生まれて初めて迎える7月1日に、浅間神社にお参りをする行事で、富士山を模した浅間塚に初めて登ることで、足腰が丈夫になるという願いを込め、子どもの健康やかな成長を祝うものである。参拝した子どもの額や産着の襟の内側に判を押したり(写真2)、親戚や近所に初山のうちわを配ったりする習俗が伝承されている。

浅間塚での初山行事は、子どもたちの健康やかな成長を願う地域の人々の手によって、今日まで受け継がれている。

(上尾市生涯学習課)

コラム column

山岳信仰と講

山岳信仰は、山や山中に開かれた社寺仏閣を中心に展開し、古来から人々の崇拜対象となってきた。中世には修験道との関係が深かったが、近世には山を拠り所とする御師が、広範囲な地域に信者を増やして信仰圏を形成した。市内では富士山を崇拜する人々によって組織された富士講(浅間講ともいう)や、群馬県榛名

山の榛名講、神奈川県伊勢原市の大山講などが知られている。

榛名講や大山講では、選ばれた者が代表して参拝を行う「代参講」が行われた。

御師は代表者の宿泊から参拝や、お礼の用意まで、一切の世話をを行った。講の対象とする社寺は、農業を見守る神様として農家の信仰を集めた。



写真3 大山(神奈川県伊勢原市)